



理想の社会をつくるため、
近江八幡に生涯を捧げた建築家

ヴォーリズの偉業

(1880-1964年)

かつては城下町として栄え、

今も和の風情漂う古い町並みが残る近江八幡。

その風景に溶け込むように、美しい洋風建築が点在している。

これらの設計を手掛けたのが、ウィリアム・メレル・ヴォーリズだ。

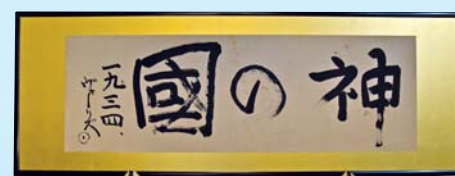
ヴォーリズは琵琶湖のほとりのこの小さな町に

「神の國」という理想の社会をつくるべく、

建築設計をはじめ、医療、教育、貿易など、

多岐にわたる社会貢献事業を展開した。

その偉業と、そこに込められたヴォーリズの信念をひもとく。



ヴォーリズ記念館にある
直筆の「神の國」の書。



ヴォーリズ学園。庭には学園長だった
満喜子の像がある。
取材協力：(公財)近江兄弟社
(株)一粒社ヴォーリズ建築事務所
関西学院大学
神戸女学院大学

キリスト教精神を礎とし、 人々の豊かな暮らしのために尽力

1905年、ヴォーリズは
近江八幡に降り立つ。目的は
キリスト教の伝道。とはいえ、
ヴォーリズにとって、伝道と
は人々をキリスト教に取り込
むことではなかった。人間生
活の基準となる、身体的にも
精神的にも豊かな暮らしこそ、
キリスト教的生活。ヴォーリ
ズはその実現をめざしたので。

だからこそ、ヴォーリズは医
療も教育も行き届いていないこ
の町に来たとき、「ここが神か
ら示され、遣わされた地」と確
信する。サインの横にはいつも
丸を書き、その中に点を打つ
た。これは「近江八幡は世界の
中心」という意味。自分がいる
べき場所はこのなんだという決
意の現れである。

そして、この地でヴォーリズ
はキリスト教的生活を実践す
る「神の國」理想の社会をつ
くるべく、様々な活動を展開
する。近江療養院(現ヴォー
リズ記念病院)の開設、幼稚



関西学院大学時計台原図
資料提供：
(株)一粒社ヴォーリズ建築事務所

園から高等学校に及ぶ教育活
動、図書館の運営や通信教育
事業、学校・教会・デパートな
どの建築設計、また近江セー
ルズ(現(株)近江兄弟社)を設立
し、建築部材、家具、楽器、
さらにはメンソレータム(現メン
タム)の輸入・販売も行った。
事業で得た収益はすべて、社

会奉仕活動、医療、教育、福
祉の充実にあてられた。

太平洋戦争勃発の折には、
母国アメリカと愛する日本が
敵同士となる中、日本に帰化。
自らの名を「米来留(めれる)」
とする。「アメリカから来て留
まる」という意味を込めたその
名から、日本を愛し、この地
の人々に尽くすという壮絶な
信念を伺い知ることができる。

すべては「人間中心」。 その人柄が慕われ、名誉市民第二号に

単身日本へやって来たヴォー
リズは、伝道団体・近江ミッ
ションを設立し、多くの仲間
を得て活動していく。妻・柳
満喜子もまた、重要な働きを
した人物の一人だ。

満喜子は、小野藩主であった
一柳末徳子爵の娘。進歩的で聡
明だった彼女は、アメリカに留
学し、帰国後に兄・廣岡恵三の
通訳としてヴォーリズと出会う。

身分も国籍も違う二人の結婚に
周囲が猛反対する中、この結婚
を後押ししたのが、恵三の義母
である廣岡浅子だった。近江八
幡に来た満喜子は、教育を満足
に受けられない子供たちを見て、
本格的な教育活動に乗り出す。

これが、今に続くヴォーリズ学
園の始まり。満喜子もヴォーリ
ズと共に、近江八幡のために活
躍した二人だったのだ。

ヴォーリズの活動は、そのすべ
てが人を思う博愛精神から生ま
れている。建築もしかり。「建物
の風格は人間の人格と同じく、

その外観よりもむしろ内容に
ある」という言葉が示すとおり、
ヴォーリズは見た目よりも、そ
こで過ごす人の心地よさと健康
を第一に考えた。手掛けた建造
物は、全国に1500件以上。
そのどこを訪れても共通して感
じられる心地よさ、温かな空気
感、人を思い、設計されてい
るヴォーリズ建築ならではの魅
力といえるだろう。

気さくな人柄と、人のため
に尽くす活動で、近江八幡の
人々から慕われたヴォーリズ
は、名誉市民第一号に選ばれ
る。そして、その偉業は83年
の生涯を閉じてなお引き継が
れ、発展を続けている。

上／公私共により、
近江八幡のために
活動したヴォーリズ
と満喜子。
下／ヴォーリズ学
園にあご近江八幡
は世界の中心」
を示すシンボル
マークの石碑。



人を思い、自然と共生するヴォーリス建築

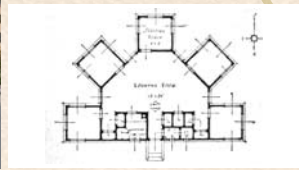


建築事務所で作成
に設計を指示する
ヴォーリス。

ヴォーリス記念病院



プライベートとコミュニケーションの両立を実現した「希望館」の設計図。手のひらを伏せた形に似ていることから「五葉館」と呼ばれた。



近江療養院として設立され、結核療養を扱う近江サナトリウムになってからは、病気の治療だけでなく、病気によって社会から疎外されていた結核患者の救済の場にもなった。人の心を癒す、自然に抱かれた穏やかな空間づくりに、ヴォーリスの思いやりが感じられる。なかでも特筆すべきは、「五葉館」と呼ばれ親しまれた病棟「希望館」。病院といえどもプライバシーを尊重し一人になれる空間をつくるとともに、一方で人との交流も必要との配慮からコミュニケーションスペースを用意。まさに、ヴォーリスの「人間中心」の精神が顕著に現れている建築物だ。

ウォーターハウス記念館



近江ミッションの住宅で、ヴォーリスに共鳴し近江ミッションに加入したウォーターハウスが住んでいた。ヴォーリスが手掛けた住宅は、暖炉を設けて家族のコミュニケーションをはかり、光の入る窓が多数あることが特徴。子供の成長の器として、一家団欒の場として、ホッとする空間づくりがなされている。

旧八幡郵便局



大正期のヴォーリス建築の一つ。ヴォーリスは建築物を設計する際、その建物の目的をきちんと果たせるつくりをすることを重視した。郵便局は町が町として機能するために必要な建物。だから、誰が見ても郵便局とわかるようにという意図によって設計されている。

アンドリュース記念館・近江八幡教会



ヴォーリスの親友であり、若くして召天したハーバート・アンドリュース氏を記念するヴォーリス建築第一号の建物と、それに隣接して建てられた教会。スパニッシュ瓦を使った洋風建築でありながら、和の要素も取り入れ、日本の気候風土に合わせてつくられている。

関西学院大学



スパニッシュ・ミッション・スタイルで統一された美しいキャンパス。甲山を背景に、芝生の緑、風の流れ、正門から見た風景まで緻密に計算してつくられた時計台は、今や誰もが認める関学のシンボル。ここで学ぶ学生たちの誇りにもなっている。

神戸女学院



満喜子の母校でもある同大学が、現在の場所に移転したときヴォーリスがキャンパスのすべてを手掛けた。国の重要文化財でもある。靴音を抑えるラバータイルの床、ゴミがたまりにくい床のカーブ、心地いい窓からの光。随所に思いやりがあふれる空間だ。

近江八幡市内に20棟余り現存する建造物をはじめ、全国各地に残るヴォーリス建築の魅力は、自然との共生、調和をテーマにしながら、常にそこで過ごす「人」を思い設計されていること。建築設計において、ヴォーリスがとくに重視したことに注目してみた。

ヴォーリス学園



ヴォーリスが初代理事長、満喜子が学園長を務めた学園。2015年に近江兄弟社学園からヴォーリス学園に名称変更。現在は、こどもセンター・小学校・中学校・高等学校がある。

ヴォーリス記念館



ヴォーリス夫妻が後半生を過ごした住宅。収納を多く設けて、満喜子のために日本の生活様式に合わせて和室を取り入れるなど、ここで長い時間を過ごす人への配慮を重視したヴォーリスの設計態度が反映されている。ヴォーリスは私有財産を増やすことはせず、この住居も個人所有として登記されたことはない。

ハイド記念館
(ヴォーリス学園内)

満喜子が教育活動に乗り出し、幼児教育を始めてから約10年後に、メンソレータムの創始者・ハイド氏の寄付によって建設された園舎。階段の踏み板は広く、窓は低く、ただし鍵は高い位置につけるなど、子供の安全と健康を考えたつくりになっている。

ヴォーリスが重視したこと [1]

「心」を育てる環境づくり

たとえば住宅であれば、一番長い時間を過ごす妻と、そこで成長する子供たちが心地よく、安全に過ごせる空間を。社員寮であれば、その会社で働く社員がベストな状態で仕事をするための、健全な心と体が養える環境を。デパートであれば、訪れるお客さんが楽しめる仕組みづくりを。トイレは明るく清潔に。床はゴミがたまりにくい仕様に。これらはすべて、「環境が人間の心に大きな影響を与える」という考えによるもの。どのヴォーリス建築を訪れても「なんと心地いい」と感じるの、一貫して「人」を思い、人の心に与える影響まで考えてつくられているからだ。

ヴォーリスが重視したこと [2]

「依」頼者の思い

依頼者の求めに応える奉仕の精神を貫いたことも、ヴォーリスの建築に対する姿勢の一つだ。それ故に、依頼者が何を思い、何を求めてその建物を建てようとしているのかを直接インタビューし、それを実現するためのコンセプトづくりを重要視した。インタビューの帰り道で図面の下書きにコンセプトをメモ書きし、事務所に持ち帰ると、仲間たちが正確な図面へと仕上げていく。時には依頼者の苦勞や人生観を知った上で、それを象徴するようなモチーフを建物に取り入れることもあった。つくるのは建物でも、ヴォーリスが行っていた設計は人の思いを形にすることだったのだ。

ヴォーリスが重視したこと [3]

「光」あふれる空間づくり

ヴォーリス建築の特徴の一つは、窓が非常に多いことだ。これは「光」を重要な要素として考えていたから。太陽の光は開放感を与えるだけでなく、殺菌効果によって人間の健康にも影響を及ぼす。人が心地よく、健康に過ごすために必要不可欠なものとして、ヴォーリスは徹底的に光を入れることを建築のテーマにしたのだ。また、窓をつくるときは、外から見たデザイン性ではなく、建物の中のどこに光が必要かを考えて窓を配置していった。「外観よりもむしろ内容」、そこで過ごす「人」のことをまず考えるヴォーリスの博愛精神が、こんなところに見てとれる。